平家物語

永積安明 著

誠信書房

著者略歴

1908年山口県に生る。
1932年東京大学文学部国文学科卒業。
現在日本学術会議会員、神戸大学文学部教授。
主要著書
「中世文学論」1944年　日本評論社
「太平記」（続日本古典読本）1948年　日本評論社
「中世文学の展望」1956年　東京大学出版会
「古典文学の伝統」1956年　法政大学出版局

昭和三十二年二月二十五日　第一刷発行

平家物語

定価　三八〇円

著作者　永積安明

発行者　柴田乙松
東京都千代田区神田小川町三ノ二

印刷者　島田耕三
東京都港区芝新橋四ノ三八

発行所　株式会社　誠信書房
東京都千代田区神田小川町三ノ二
振替東京一〇二九五
電話東京(29)八二七六
四七〇九

島田印刷　小高製本

落丁・乱丁の節はお取替いたします。

© 1957

はしがき

「日本古典読本」の一冊として、本書が出版されたのは、一九四〇年のことであり、それは、太平洋戦争のはじまる一年前にあたつている。

当時は、日本浪漫派などを中心に、国家主義的な伝統文学論が、さかんに説かれていたころであり、伝統を国民のなかにではなく、上からの至上命令としてとらえたかれらは、当然のことながら、正面から文学におけるリアリズムを排撃した。私のこの書が、その論の基本を、「平家物語」におけるリアリズムの達成の追究においたのも、一つには、このような当時の支配的な文学的傾向に対立せざるをえなかつたところから来ている。

しかし、また一方では、当時世界的に問題にされていた、世界観と創作方法についての論争があつた。そうして本書の論法も、ほとんど直接的に、この論争から強い影響をうけている。

つまり、この論争のなかから、リアリズム論の方法をくみとつた著者は、また一方では、近代文学とことなる中世文学に、ほとんど直接的にこの論法をおしつけるというけつかをも、もたらしたということができる。

つぎに、本書は、当時国文学の世界では、環境論以上にとりあげようとしなかつた歴史の土台の問題を、「平家物語」論にくみ入れようとしている。しかし、当時の日本史学そのものの段階ということもあつて、たとえば、古代と中世との時代区分なども、まだあきらかでなく、本書は平安時代の文学をも、中世文学として規定している。

これらのさまざまな不十分さは、いまではきわめてあきらかに指摘できる。

しかし、「平家物語」を変革期のなかで、そのゆたかなリアリズムによつて評価したことは、この書がはじめて試みたことであり、戦後の研究は、その方向の確認のうえに、さまざまな成果をもたらして来た。

さらにいえば、本書が、まがりなりにもなしえたところがあるとするならば、それは、単にいわゆる「客観的」に作品を分析し研究したところからではなく、むしろ、よかれあしかれ、一つの文学的主張として、その頃の支配的な文学観、したがつてまたそれまでの「平家」観との対立をあき

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

らかにしようとしたところを通じてえたものによつている。そのような部分において、本書は現代の「平家物語」研究につながることができよう。

けれども「平家物語」の研究は、戦後において飛躍的に前進している。したがつて本書が、いまとりあげられるとするならば、新しい今日の課題の展望のうえに立つて、これを批判的に読まれることがのぞましい。

そこで私は、自分自身の戦後の「平家」論をもふくめて、諸家の研究の多様な達成を、「あとがき」として、やや詳細に展望しておいた。

本書を読まれるにあたつては、まず、この展望によつて、戦後の「平家」研究の成果と、その現代的課題のあらましを、まず受けとめられることを期待したい。また著者としては、読者諸氏が、「あとがき」に紹介した論文をもふくめて、戦後の「平家」研究のひとつのまとめとしての拙著、「中世文学の展望」（一九五六年、東京大学出版会版）を、あわせ読まれて、本書に出発した著者のその後の展開に対しても、さらに批判と助言とをあたえられることをおねがいしたい。

「日本古典読本」の一冊として、当時の日本評論社から本書が出版されて以来、すでに十六年を経過した。そのあいだ何回か版をかさねて来た本書は、ここに、誠信書房の好意とすぐれた技術に

よつて、紙型を焼失した初版そのままの姿で、あらたに出版する機会をえた。本書が単なる歴史的文献としてだけでなく、その欠陥の克服をもふくめて、新しい世代の「平家物語」研究の出発にあたつての、入門書の一つとして、なおいくらかでも役たちうるならば、さいわいである。

一九五七年二月

著者

目次

はしがき……一
本文・評釋篇……一
巻第一
祇園精舍……三
殿上闇討……九
（鑪）……一四
禿髪……一五
（我身榮花）……一七
祇王……一七
（二代后）……三一

額打論……三一
（清水寺炎上・東宮立）……三三
殿上乘合……三四
鹿谷……四三
鵜川軍……四七
（願立・御興振・內裏炎上）……五三

卷第二

（座主流）……五三
一行阿闍梨之沙汰……五三
（西光被斬・小教訓・少將乞請）……五八
教訓狀……五八
烽火之沙汰……六四
（新大納言被流・阿古屋松・大納言死去・德大寺殿之沙汰・

堂衆合戰・山門滅亡・善光寺炎上・康賴祝言・卒都婆流・蘇武）……七一

卷第三

赦文……七三
足摺……七七
（御產・公卿揃・大塔建立・賴豪・少將都歸）……八一
有王……八一
（僧都死去・颰・醫師問答・無文・燈籠之沙汰・金渡・法印問答・大臣流罪・行隆之沙汰・法皇被流・城南離宮）……八六

卷第四

（嚴島御幸・還御）……八七
源氏揃……八七
（鵺沙汰）……九二
信連……九二

競……九七
（山門牒狀・南都牒狀・永僉議・大衆揃）……一〇三
橋合戰……一〇四
宮御最後……一一〇
（若宮出家・通乘沙汰）……一一五
鵺……一一五
（三井寺炎上）……一一一

卷第五

（都遷）……一一三
月見……一一三
（物怪之沙汰・早馬・朝敵揃・咸陽宮）……一一七
文覺荒行……一一七
（勸進帳）……一一九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

文覺被流……一三〇
（福原院宣）……一三三
富士川……一三四
（五節之沙汰・都歸・奈良炎上）……一四一

卷第六

（新院崩御・紅葉・葵前・小督・廻文・飛脚到來）……一四三
入道死去……一四三
（築嶋・慈心坊・祇園女御・州俣合戰・嘎聲・横田河原合戰）……一四六

卷第七

（淸水冠者・北國下向・竹生島詣・火打合戰・願書・倶梨迦羅落・篠原合戰）……一四七
實盛……一四七
（還亡・木曾山門牒狀・返牒・平家山門連署・主上都落・維

盛都落・聖主臨幸）……一五〇
忠度都落……一五一
（經正都落・青山之沙汰・一門都落）……一五二
福原落……一五三

卷第八

（山門御幸・名虎・緒環・太宰府落・征夷將軍院宣）……一五六
猫間……一五六
（水島合戰・瀬尾兼期・室山・鼓判官・法住寺合戰）……一五九

卷第九

（生食の沙汰）……一六〇
宇治川先陣……一六〇
（河原合戰）……一六三
木曾最後……一六四

（樋口誅罰・六箇度軍・三草勢揃・三草合戰・老馬・一二之懸・二度之懸）……一六八
坂　落……一六九
（越中前司最期）……一七一
忠度最期……一七二
（軍衡生捕）……一七三
敦盛最期……一七四
（知章最期・落足・小宰相身投）……一七六

卷第十

（首渡・內裏女房・八島院宣・請文・戒文）……一七七
海道下……一七七
（千手前・橫笛・高野之卷・維盛出家・熊野參詣・維盛入水・三日平氏・藤戶・大嘗會沙汰）……一八〇

卷第十一

（逆櫓・勝浦付大坂越・嗣信最期）……一八三
那須與一……一八三
弓流……一八五
（志渡合戰）……一八八
鷄谷　壇浦合戰……一八八
（遠矢・先帝身投）……一九二
能登殿最期……一九二
（内侍所都入・劍・一門大路渡・鏡・文之沙汰・副將被斬・腰越・大臣殿被斬・重衡被斬）……一九六

卷第十二

（大地震・紺掻沙汰・平大納言被流・土佐房被斬・判官都落六代・長谷六代）……一九七

六代被斬……一九七
灌頂巻
（女院出家・大原入）……二〇七
大原御幸……二〇七
（六道の沙汰）……二一二
女院御往生……二一三
〔附録〕系譜
1 皇室御系略譜　2 藤原氏家系略譜
3 平氏家系略譜　4 源氏家系略譜
研究篇……二三五
前篇　平家物語評釋（本文・評釋篇所収）
後篇　平家物語概論……二七

序詞……二一七
第一章　文獻學的な諸問題の概括……二一九
(1) その傳來……二一九
(2) その成立……二二三
(3) その作者——附、「平曲」論……二三八
第二章　平家物語と時代概念……二三八
第三章　平家物語の根本問題……二四八
(1) 世界觀と方法……二四八
(2) 題材の問題……二六二
(3) 新しい人物創造と新しい文章……二七一
(4) 「戰爭文學」と「歷史文學」……二八五
結語……二九四
〔附錄〕平家物語研究の手引——參考書解題……二九六
あとがき　戰後における「平家物語」研究史の展望……三〇七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo